

異世代間交流を通じた大学と地域との連携に関する

次世代育成プログラム開発の研究

プロジェクト代表者：吉川 はる奈（教育学部・准教授）

1、研究の背景

次世代育成支援は現代の国全体が模索している課題の1つであるが、実態は地域住民の実践力によるところが大きく、地域格差が大きい実態がある。本研究では、次世代育成支援を大学での学際的な知見にもとづいた質の高いプログラムとして提案することをめざし、「異世代間交流を通じた大学と地域の連携に関する次世代育成支援プログラムの開発と提案」を目的にした2つの研究をすすめた。

具体的には①研究1として、大学生を対象として地域の子育て中の親へのインタビュー体験を通して学ぶ内容を分析し、②研究2として、中学生を対象として、地域の子育て中の親へのインタビューを通して学ぶ内容を分析した。いずれも地域住民の子育て中の親と子が参加し、家族以外の親子のかかわりを学ぶ体験として設定した。これらの結果をふまえ③親と子のかかわりを具体的に学ぶことを通して子どもイメージを具体化する体験的活動の意味について生涯発達の視点から考察した。同時に通常の保育体験学習との差異について言及し、親子のかかわりを学ぶ意味について考察した。さらに④異世代間交流を通して、現代家族のおかれた状況をふまえた、地域を巻き込んだ積極的授業展開を提案した。

2、対象と方法

研究1 大学生が子育て中の親にインタビューする体験を通して学ぶ内容の検討

- 1) 対象：教員養成学部の大学1年生 25名 及び

子育て中の母親3名とその子ども3名（母親は参加を希望した市内在住者で）

2) 方法：大学生が3グループ（8名×2と9名×1）にわかれ、各グループに1名ずつ母親と子どもが参加した。各グループごとに大学生の司会で母親にインタビューを行なった。インタビュー時間は30分。参加者が机を中心にサークルになって座り、子どもの前にはおもちゃを置いた。子どもは母親の膝に座って自由に遊んでいた。とくにその姿勢を指定したわけではない。終了直後に大学生、母親双方がインタビューを通して気づいたことや感じたことを記述した。大学生と母親が記述した資料を分析の対象とした。

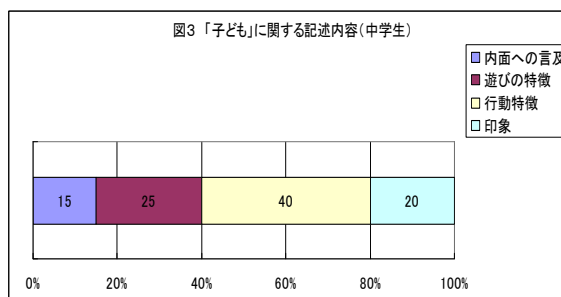
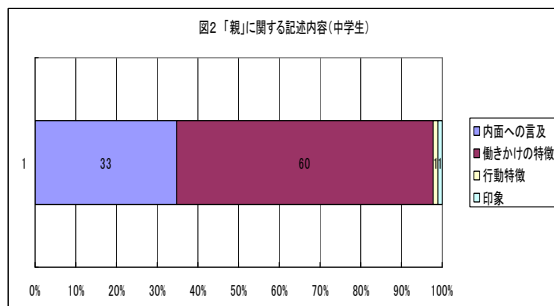
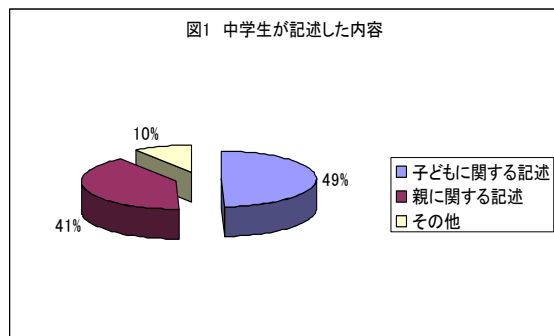
研究2 中学生が親子にインタビューする体験を通して学ぶ内容の検討

- 1) 対象：公立中学3年生 35名 及び

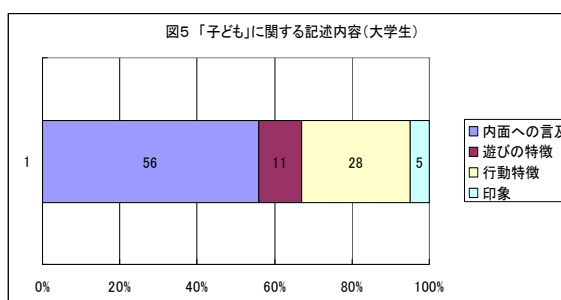
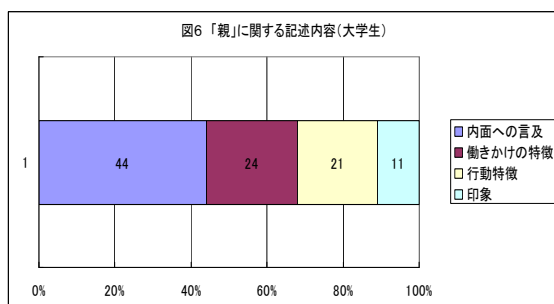
子育て中の母親4名とその子ども4名（母親は参加を希望した市内在住者）

2) 方法：中学生が2グループ（18名と17名）に分かれ、各グループに2名ずつ母親とその子どもが参加した。各グループごとに中学生の司会で母親にインタビューを行った。インタビューの時間は30分。子どもがリラックスできるように、参加者全員がサークルになって床に座り、サークルの中にはおもちゃを置いた。子どもは親のとなりや、膝に座って自由に遊んでいたが、特にそのような姿勢を指定したわけではない。終了直後に中学生、母親双方がインタビューを通して気づいたことや感じたことを記述し、分析の対象とした。

3、結果と考察



結果として、①子どもが参加することで日常的な親から子へのやりとりにつれ、中学生の記述では記述が抽象的でなく具体的内容であったこと、②大学生の記述には子どもの外面的特徴にとどまらず、内面的特徴に言及するものが多かったこと③子育て中の母親世代、中学生、大学生いずれもたがいが交流しあう体験をしておらず貴重な機会となったこと、④育成支援プログラムは中学生や大学生だけでなく子育て中の親へも効果があったこと、⑤次世代育成支援の視点から、地域を巻き込んだ積極的授業展開は中学生だけでなく大学生にも有効であることなどが明らかになった。さらに単に、学生が、子どもが生活する場で「体験する」ということではなく、子どもと大人の関わりを「じっくり」「みる」「観察する」「感じる」「理解しようとする」「考える」ことを通して、リアリティある生活の場での子ども理解へと可能になるのではないと思われる。



4、今後に向けて

上記の研究結果をふまえ、さいたま市の他の中学校3校で、本研究で提案した次世代育成支援プログラムを授業に取り入れ実施していく予定である。

5、成果の概要

・吉川はる奈・金子京子「中学生と大学生を対象とした保育学習に関する実践的研究—子育て中の親へのインタビュー授業から—」埼玉大学教育学部教育実践センター紀要、2007